

『集古録』をめぐる人々

湯 浅 陽 子

【要旨】

金石学の成果のうち現存する最初期のものとして知られる北宋・歐陽脩『集古録跋尾』十巻は、歐陽脩の金石蒐集の状況と、その目的である歴史および文学テクストまた書法のより精確な考証が、どのように行われているかを詳細に記録している。歐陽脩のこのような金石蒐集と考証は、彼の周囲に存在していた、金石に関心を持ちその蒐集や考証を行っていた多くの友人たちの協力を得て生み出されたものである。しかし、長期間に及ぶ蒐集の過程で、それらの友人たちのなかには世を去る者が次第に増え、また金石にも時間の経過のなかで傷み失われるものがあり、そのような状況を受けて、歐陽脩は『集古録跋尾』所収の跋文のなかで、人と金石それぞれの有限性についてしばしば思いをめぐらせている。歐陽脩と彼の友人たちの金石蒐集は、その後の世代の孫覺や李公麟による金石蒐集に継承され、さらに北宋末期には、徽宗編の『宣和殿博古圖』や張明誠の『金石録』という成果を生むに至った。また、『集古録跋尾』のなかで歐陽脩が述べていた人と金石それぞれの有限性について思いは、任官の初期に歐陽脩の金石蒐集に関わった蘇軾に影響を与え、その後彼によって深く思考され、その詩文の中で様々に表現されていくことになった。

はじめに

清・紀昀（一七二四—一八〇五）等による『四庫全書總目提要』巻十七「史部目錄類二」（合印四庫全書總目提要及四庫未收書目禁燬書目

臺灣商務印書館 一九八五年増訂三版）は、北宋・歐陽脩（一〇〇七—一〇七二）の編んだ『集古録』十巻について、いくつかの側面から解説するなかで、その先駆けとなった書物について、次のように述べている。

古人法書、惟重真蹟。自梁元帝始集録碑刻之文爲『碑英』一百二十卷、見所撰『金樓子』、是爲金石文字之祖、今其書不傳。曾鞏欲作金石録而未就、僅製一序、存『元豐類藁』中。

古人の法書は、惟だ真蹟を重んずるのみ。梁元帝 始めて碑刻の文を集録して『碑英』一百二十巻を爲し、撰する所の『金樓子』を見るに、是れ金石文字の祖爲るも、今 其の書 傳はらず。曾鞏 金石録を作らんと欲すれども未だ就かず、僅かに一序を製するのみにして、『元豐類藁』中に存す。

ここではまず、金石文を集めた先駆けとして、梁元帝（蕭繹 五〇八—五五四）の『碑英』一百二十巻（既佚）を挙げ、また歐陽脩と同時期の曾鞏（一〇一九—一〇八三）にも金石録の編集の計画があったが果たせず、その別集『元豐類藁』所収の序一篇を制作したのみにとどまったと記している。ここで言う曾鞏の「序一篇」が、具体的に何を指しているのかはよくわからないが、現行の『南豊先生元豐類藁』巻五十一（四部叢刊本）には「金石録跋尾十四首」が収められており、曾鞏が金石に刻まれた文字に関心を持ち、跋尾を制作していたことは確かである。

この提要の文章の撰者である紀昀らは、このように歐陽脩の金石研究

を彼の独創により開拓されたものとは考えず、南朝梁以降、長きに渡って途絶えていた金石研究を、北宋期において復活させた成果として位置づけている。また、同じ時代には他の人物によっても金石研究が行われており、歐陽脩の金石研究が当時における孤立例ではないことを指摘している。そこで本稿では以下、歐陽脩『集古録跋尾』十卷（歐陽文忠公集卷一百三十四—一百四十三所収 四部叢刊本）の記述を主な資料とし、具体的な例に拠りつつ、歐陽脩の金石蒐集と考証がどのように進められているのかを検討し、さらに、『集古録跋尾』中に散見する歐陽脩に近い知識人たちの金石愛好をめぐる記事から、彼らの金石に対する姿勢あるいは思考のあり方について考えてみたい。

一 『集古録跋尾』の編集方針と考証について

『集古録跋尾』の編集の方針について、歐陽脩自身は、嘉祐七年（一〇六二）の「集古録目序」（四部叢刊本『集古録跋尾』冒頭）のなかで、次のように述べている。

夫力莫如好、好莫如一。予性顯而嗜古、凡世人之所貪者皆無欲於其間、故得一其所好於斯、好之已篤、則力雖未足、猶能致之。故上自周穆王以來、下更秦・漢・隋・唐・五代、外至四海九州、名山大澤、窮崖絕谷、荒林破塚、神仙鬼物、詭怪所傳、莫不皆有、以爲『集古録』。以謂轉寫失真、故因其石本、軸而藏之。有卷帙次第而無時代之先後、蓋其取多而未已、故隨其所得而錄之。又以謂聚多而終必散、乃撮其大要、別爲録目、因并載夫可與其史傳正其闕繆者、以傳後學、庶益於多聞。

夫れ 力は好むに如かず、好むは一なるに如かず。予 性 顯にし

て古を嗜み、凡そ世人の貪る所の者は皆な其の間に欲する無く、故に一の其の好む所を斯に於いて得、之を好むこと己に篤ければ、則ち力は未だ足らざると雖も、猶ほ能く之を致す。故に上は周穆王より以來、下は秦・漢・隋・唐・五代を更て、外は四海九州、名山大澤、窮崖絶谷、荒林破塚、神仙鬼物、詭怪の傳ふる所に至るに、皆な有らざる莫く、以て『集古録』を爲る。以謂らく轉寫すれば真を失はんと、故に其の石本に因り、軸して之を藏す。卷帙の次第有れども時世の先後無し、蓋し其の取ること多くして未だ已まざれば、故に其の得る所に隨ひて之を録す。又た以謂らく聚まること多ければ終に必ず散せんと、乃ち其の大要を撮し、別に録目を爲り、因りて并せて夫の其の史傳の與に其の闕繆を正すべき者を載せ、以て後學に傳へ、多聞に益せんことを庶ふ。

ここで歐陽脩は、まず収録の対象について次のように述べている。年代は、古代の西周（前約一〇〇〇—前約七七〇） 穆王期から秦・漢・唐をへて、宋人からは近い過去である五代（九〇七—九六〇）までの、およそ二千年間であり、また対象地域は、中国全土の名山大沢、窮崖絶谷等から荒れた林や壊れた塚までの、名所旧跡から名も無い叢林や古い墓までを広く含み、その中には神仙鬼物等の怪しげな存在が伝えたとされるものまで含むとしている。ここで示されている範囲は特定の時代や地域に限るというものではなく、つまるところ、歐陽脩という北宋中期のひとりの知識人に可能な限り、時間的にも空間的にも限りを設けずに広範に集めたということになるのではないだろうか。

次に蒐集の形態については、書写により本来の姿を失うことを避けるため、拓本を軸装して蔵したとし、また作品の収録順は、年代順ではなく入手順としている。しかし現行本のテクストは各資料をほぼ時代順に

編集しているため、「目序」の記述との間に矛盾が生じており、この点に関しては、既に多くの人々によって議論が重ねられている。

さらに歐陽脩はこの『集古録跋尾』の編集目的について、蒐集されたものが大量になると散逸の恐れが生じるため、その大要を採って別に目録を制作したと、史書の記述の欠落や誤りを訂正できる資料を掲載することにより史学の研究に益することの二点を挙げています。

次に、このような編集方針が、実際の記述にどのように反映されているのかを、いくつかの例について確認してみよう。

まずひとつめの例として、『集古録跋尾』巻四所収の「南齊海陵王墓銘」を挙げてみよう。

右「南齊海陵王墓銘」、長兼中書侍郎謝朓撰。海陵王昭文者、文惠太子次子也。初、明帝鸞既廢鬱林王昭業、而立昭文、又廢爲海陵王而殺之、遂自立。按「謝朓傳」、朓當海陵王時爲驃騎諮議、領記室、又掌中書郎、後遷尚書吏部郎。此誌題云「長兼中書侍郎」、而據傳、朓未嘗爲中書侍郎、史之闕也。按「南齊書」、劉俊爲長兼侍中、後魏臨淮王彧爲長兼御史中尉、『南・北史』多有此名、蓋當時兼官之稱、如唐檢校官之類也。嘉祐八年九月十七日書。

右「南齊海陵王墓銘」、長兼中書侍郎謝朓撰。海陵王昭文なる者は、文惠太子の子なり。初め、明帝鸞 既に鬱林王昭業を廢し、而して昭文を立て、又廢して海陵王と爲し而して之を殺し、遂に自ら立つ。「謝朓傳」を按ずるに、朓は海陵王の時に當りて驃騎諮議と爲り、記室を領し、また中書郎を掌し、後に尚書吏部郎に遷る。此の誌の題に「長兼中書侍郎」と云ふも、傳に據るに、朓は未だ嘗て中書侍郎と爲らず、史の闕なり。『南齊書』を按ずるに、劉俊は長兼侍中と爲り、後魏の臨淮王彧は長兼御史中尉と爲り、『南・北史』

に多く此の名有り、蓋し當時の兼官の稱にして、唐の檢校官の類の如くならん。嘉祐八年九月十七日書。

ここではまず、「海陵王」が文惠太子の次子海陵王昭文を指すことを考証し、さらに、明帝鸞が鬱林王昭業を廢して昭文を立て、さらにこれを廢して海陵王としてこれを殺し、ついには自分が即位したという経緯を説明している。その後は、撰者である謝朓の「長兼中書侍郎」という官名について検討し、『南齊書』巻四十七「謝朓傳」（中華書局本）の、

高宗輔政、以朓爲驃騎諮議、領記室、掌霸府文筆。又掌中書詔誥、除祕書丞、未拜、仍轉中書郎。出爲宣城太守、以選復爲中書郎。建武四年、出爲晉安王鎮北諮議、南東海太守、行南徐州事。啓王敬則反謀、上甚賞之。遷尚書吏部郎。

高宗 輔政し、朓を以て驃騎諮議と爲し、記室を領せしめ、霸府文筆を掌らしむ。又書詔誥を掌り、祕書丞に除せられ、未だ拜せざるに、仍ち中書郎に轉ず。出でて宣城太守と爲り、選を以て復た中書郎と爲る。建武四年、出でて晉安王鎮北諮議、南東海太守、行南徐州事と爲る。啓王敬則 反謀するに、上 甚だ之を賞す。尚書吏部郎に遷る。

あるいは『南史』巻十九「謝裕傳」附弟述孫朓（同）の、
明帝輔政、以爲驃騎諮議、領記室、掌霸府文筆。又掌中書詔誥、轉中書郎。出爲晉安王鎮北諮議、南東海太守、行南徐州事。啓王敬則反謀、上甚賞之、遷尚書吏部郎。
明帝 輔政し、以て驃騎諮議と爲し、記室を領せしめ、霸府文筆を掌らしむ。又中書詔誥を掌し、中書郎に轉ず。出でて晉安王鎮北諮議、南東海太守、行南徐州事と爲る。啓王敬則 反謀するに、上甚だ之を賞し、尚書吏部郎に遷す。

という記述に抛りつつ、海陵王の時代における、謝朓の驃騎諮議から尚書吏部郎に至る官歴をたどっている。その上で、この墓誌銘の題には「長兼中書侍郎」とあるが、伝では朓はまだ中書侍郎とはなっていないことについて、史書の誤りと指摘している。

さらに「長兼」という官名について、『南齊書』（卷三十七「劉俊傳」）に劉俊が長兼侍中となったという記事があること、後魏の臨淮王彧が長兼御史中尉となつてゐること（『魏書』卷十八「臨淮王譚傳附子彧」（同））を挙げ、この官名は『南史』・『北史』に多く見ることができ、唐代の檢校官のような、当時の兼官の称号であろうと考えている。

この例では、碑文中にある意味の不明な語句について、史書を参照して考証が進められているのだが、これとは逆に、碑文中の記載内容によって史書の記述を補おうとするものも存在している。例として「唐吳廣碑」總章二年（『集古録跋尾』卷五）を挙げてみよう。

右「吳廣碑」、不著書撰人名氏、而字畫精勁可喜。廣字黑圍、唐初與程知節・秦叔寶等俱從太宗征伐、後與殺建成有功。至高宗時、爲洪州都督以卒。然『唐書』不見其名氏、惟『會要』列陪葬昭陵人、有洪州刺史吳黑圍、亦不知其名廣也。其名字事蹟、幸見於後世者、以有斯碑也。碑字稍摩滅、世亦罕見、獨余『集録』得之、遂以傳者、以其筆畫之工也。故余嘗爲蔡君謨言、書雖學者之餘事、而有助於金石之傳者、以此也。治平元年八月八日書。

右「吳廣碑」、書撰人の名氏を著さず。而るに字畫は精勁にして喜ぶべし。廣字は黑圍、唐初に程知節・秦叔寶等と俱に太宗の征伐に従ひ、後に建成を殺すに與て功有り。高宗の時に至り、洪州都督と爲りて以て卒す。然るに『唐書』に其の名氏を見ず、惟だ『會要』に列なりて昭陵に葬るに陪する人に、洪州刺史吳黑圍と有るのみに

して、亦其の名の廣なるを知らざるなり。其の名字と事蹟の、幸ひにして後世に見はるるは、斯の碑有るを以てなり。碑の字は稍や摩滅し、世に亦見ること罕にして、獨り余の『集録』の之を得るのみ、遂に以て傳ふるは、其の筆畫の工みなるを以てなり。故に余の嘗て蔡君謨の爲に言ひて、書は學者の餘事なりと雖も、金石の傳に助くる者有りとするは、此を以てなり。治平元年八月八日書。

この碑文が取りあげている吳廣（字、黑圍）は、唐初に程知節・秦叔寶等とともに太宗の征伐に従い、後に建成を殺すにあたって功績を立て、高宗期に洪州都督在任中に亡くなったとされている。歐陽脩が言うように、『舊唐書』卷六十八、『新唐書』卷二百二十には劉黑圍とあり、吳廣の名は見えず、『唐會要』卷二十一（中華書局本）に、昭陵での大葬に参列する人として、「洪州刺史吳黑圍」とあるのみで、廣がその名であることは記されていない。たしかに、「その名字と事蹟とが、幸いに後世に現れたのは、この碑があったためである」と言うことができるだろう。この例は、書法の資料とするための金石文が、史書の記述を訂正する史料になり得ることを示している。

また、末尾に「治平元年六月十四日書。」の日付の記録を附す「後漢太尉劉寬碑」同前（中平二年）（『集古録跋尾』卷二）には、次のような記述を見ることができ。

右「漢太尉劉寬碑」。『漢書』有傳、其官闕始卒與碑多同、而傳載遷官次序頗略。蓋史之所記、善惡大事、官次雖小略、不足爲失、惟其繆誤與闕其大節、不可不正。

右「漢太尉劉寬碑」。『漢書』に傳有り、其の官闕始卒は碑と同じきもの多し、而るに傳は遷官の次序を載すること頗る略けり。蓋し史の記す所は、善惡大事にして、官次は小略けると雖も、失と爲すに

足らず、惟だ其の繆誤と其の大節を闕くるとは、正さざるべからず。劉寛という人物の傳は、『後漢書』卷二十五に収められており、この引用部分の後では碑文と『後漢書』の具体的な記述をつきあわせて、その異同を検討している。ここで注意したいのは、碑文の記述と較べて、史書の伝は官職の移動の順序の掲載がかなり簡略であるという指摘である。歐陽脩はこのことについて、「史書が記すものは、善悪と大きな出来事であり、官職の順序はいくら簡略であっても、過失とするには足らない」と考えている。これは彼自身、中心的な存在として史書の編修に関与したところのある歐陽脩が、金石碑文の記述と比較した史書の記述の性格を述べたものとして興味深いものである。ここでは、史書の記述が旨とするのは必ずしも詳細に記録することではなく、ある人物に誤りや人として守るべき重大な節義の欠落があれば、それを批判することであると考えている。ここからは、史書の編纂者としての彼の姿勢を窺うことができるだろう。

また、歐陽脩は、既に見た「集古録目序」で、「予性顯而嗜古、凡世人之所貪者皆無欲於其間、故得一其所好於斯。」（予性顯にして古を嗜み、凡そ世人の貪る所の者は皆な其の間に欲する無く、故に一の其の好む所を斯に於いて得。）と、自らの「古」の志向の専一さについて述べていたが、各々の跋文に記された、碑文に対して進められる彼の考証を辿ってみると、中唐期の韓愈等が「古」に彼らの時代においては実現されていないと感じられている儒家的理想の実現された姿を求め、これに憧憬を寄せたのとは異なり、歐陽脩の「古」に対する志向は、より精確な歴史的事実を知るところを求めもの、言い方を変えれば、歴史家としての関心から「古」に迫ろうとする傾向の強いものではないかと思われる。

『集古録跋尾』に収められた跋文には、すでにいくつかの例について見たように、金石碑文の記載と史書の記述とを照らし合わせ、それぞれの欠を相補うことを試みるものを多く見ることができ、その他に、文学テクストに関わる考証を行うものも存在している。その一例として「唐韓愈盤谷詩序」貞元中（『集古録跋尾』卷八）を挙げてみよう。

右「送李愿歸盤谷序」、韓愈撰。盤谷在孟州濟源縣、正元中、縣令刻石于其側。令姓崔、其名泐、今已摩滅。其後書云「昌黎韓愈、知名士也」。當時退之官尚未顯、其道未爲當世所宗師、故但云「知名士也」。然當時送愿者不爲少、而獨刻此序、蓋其文章已重於時也。以余家集本校之、或小有不同、疑刻石誤。集本世已大行、刻石乃當時物、存之以爲佳翫爾、其小失不足較也。

右「送李愿歸盤谷序」、韓愈撰。盤谷は孟州濟源縣に在り、正元中、縣令石を其の側らに刻せしむ。令姓は崔、其の名は泐、今已に摩滅す。其の後に書して云へらく、「昌黎韓愈、知名の士なり」と。當時退之官は尚ほ未だ顯はれず、其の道は未だ當世の宗師とする所と爲らず、故に但だ「知名の士なり」と云ふのみ。然るに當時愿を送る者少なしと爲さず、而るに獨り此の序を刻すのみなるは、蓋し其の文章の已に時に於いて重んぜらるるなり。余が家の集本を以て之を校するに、或ひは小同やじからず、疑ふらくは刻石の誤りならん。集本世に已に大ひに行はれ、刻石は乃ち當時の物にして、之を存して以て佳翫と爲すのみ、其の小失は較ぶるに足らざるなり。

韓愈の「送李愿歸盤谷序」の石刻に附された跋文である。この碑文には韓愈について「知名の士なり」とだけ記されていることから、韓愈が栄達する前のものであろうと考証し、また、多くの人が李愿を送別した

にも関わらず、韓愈による序のみが刻まれているのは、当時すでに韓愈の文章が重視されていたからであろうと考えている。その後、「世に已に大ひに行はれ」ている「余が家の集本」を用いて異同を校勘し、その結果石刻の記載を誤りであろうとしているが、この集本こそ、「記舊本韓文後」（居士外集卷二十三）に記された、歐陽脩が少年時代に友人の家で手に入れ、その後校勘を重ねたテクストである。この跋尾の記述からも、彼がこのテクストの質に大きな自信を持っていたことが窺われる。

また、「晉樂毅論」永和四年（『集古録跋尾』卷四）では、テクストの校勘と関わって、金石碑文が置かれていた状況についても言及している。

右「晉樂毅論」、石在故高紳學士家。紳死、家人初不知惜、好事者往往就閱、或模傳其本、其家遂祕藏之、漸爲難得。後其子弟以其石質錢於富人、而富人家失火、遂焚其石、今無復有本矣、益爲可惜也。後有「甚妙」二字、吾亡友聖俞書也。論與『文選』所載時時不同、考其文理、此本爲是、惜其不完也。

右「晉樂毅論」、石は故高紳學士の家に在り。紳死し、家人初め惜しむを知らず、好事者 往往にして就きて閱し、或ひは模して其の本を傳ふるに、其の家 遂に之を祕藏し、漸く得ること難きを爲す。後其の子弟 其の石を以て錢を富人に質し、而して富人の家 失火し、遂に其の石を焚き、今復た本有ること無し、益 惜しむべしと爲すなり。後に「甚妙」二字有り、吾が亡友聖俞の書なり。論は『文選』の載する所と時時同しからず、其の文理を考ふるに、此の本 是爲り、其の完からざるを惜しむなり。

故高紳學士の家にあつた「樂毅論」の刻石は、紳の没後、家族がその重要性を理解していなかったため、好事家がほしいままに模写しそのテクストを伝承することになったが、後に、紳の遺族がこの碑を祕藏する

ようになり、次第に入手しにくくなったという。さらにその遺族がその石を質に金を借り、金を貸した家が火事になってその石が焼け、原本が失われてしまうことになったという顛末が記されているが、これは、子孫の不理解や経済的困窮によって古い石刻が次第に人手に渡り、失われていった状況を伝える資料として、興味深いものである。

二 『集古録』をめぐる人々

前章では、歐陽脩が金石を蒐集した目的である、史書の記述を考証してより精確な史実を追求することが、実際にどのような行われているのかを、『集古録跋尾』の記述を資料として検討した。同書の内容は、このように彼の歴史および文学テクスト、また書法研究の成果の記録と言うことができるが、さらに言うならば、この著作には、単なる考証の記録にはとどまらない要素が含まれている。それは、この書の記述が、しばしば彼の生涯の様々な時期の回想を含み、そのなかには友人たちとの交遊を回想する記事が多く含まれ、さらにそれらの記述の中で友人たちに対する彼の思いが綴られるということである。次に本章では、『集古録跋尾』の持つこのような側面について考えてみたい。

そもそも歐陽脩の金石蒐集と『集古録』の編集は、決して彼一人だけで行っていたものではない。たとえば次の「古敦銘」毛伯敦（『集古録跋尾』卷一）からも、その様子を窺うことができる。

右「毛伯古敦銘」、嘉祐中、原文以翰林侍讀學士、出爲永興軍路安撫使。其治在長安、原文博學好古、多藏古奇器物、能讀古文銘識、考知其人事蹟。而長安秦漢故都、時時發掘所得、原文悉購而藏之。以予方集録古文、故每有所得、必模其銘文以見遺。此敦、原文得其

蓋於扶風而有此銘。原父爲予考按其事、云、「史記」武王克商、尚父牽牲、毛叔鄭奉明水。則此銘謂鄭者、毛叔鄭也。銘稱伯者、爵也。史稱叔者、字也。敦、乃武王時器也。」蓋余集録最後得此銘、當作録目序時、但有伯冏銘。「吉日癸巳」字最遠、故叙言自周穆王以來。叙已刻石、始得斯銘、乃武王時器也。其後二銘、一得蓋屋、曰、「龔伯尊彝」。其一亦得扶風、曰、「伯庶父作舟姜尊敦」、皆不知爲何人也。三器銘文、皆完可識。具列如左。

右「毛伯古敦銘」、嘉祐中、原父 翰林侍讀學士を以て、出でて永興軍路安撫使と爲る。其の治は長安に在り、原父は博學好古にして、多く古奇器物を藏し、能く古文銘識を讀み、考して其の人の事蹟を知る。而も長安は秦漢の故都にして、時時に發掘して得る所、原父悉く購ひて之を藏す。予の方に古文を集録するを以て、故に毎に得る所有れば、必ず其の銘文を模して以て遺らる。此の敦は、原父其の蓋を扶風に於いて得るに此の銘有り。原父は予が爲に其の事を考按して、云へらく、「史記」に武王 商に克つに、尚父 牲を牽し、毛叔鄭 明水を奉ると。則ち此の銘の鄭と謂ふところの者は、毛叔鄭なり。銘の伯と稱するところの者は、爵なり。史の叔と稱するところの者は、字なり。敦は、乃ち武王の時の器なり」と。蓋し余 集録して最も後に此の銘を得、録目の序を作る時に當たりては、但だ伯冏銘有るのみ。「吉日癸巳」の字 最も速く、故に叙して周穆王より以來と言ふ。叙 已に右に刻みて、始めて斯の銘を得るに、乃ち武王の時の器なり。其の後の二銘は、一は蓋屋に得、「龔伯尊彝」と曰ふ。其の一は亦 扶風に得、「伯庶父作舟姜尊敦」と曰ひ、皆 何人爲るかを知らざるなり。三器の銘文は、皆完くして識るべし。具さに列ぬるに左の如し。

これによると、「毛伯敦銘」は、嘉祐年間（一〇五六—一〇六三）に長安（現陝西省西安市）に在任していた劉敞（字、原父。原甫とも書く。一〇一九—一〇六八）が、新たに發掘された遺物の銘文を模写して贈ってくれたものであるという。劉敞は歐陽脩が古文を収集していることを既に知っていたのだろう。古文に精通している劉敞は、さらに『史記』（卷四「周本紀」）の記述と照らし合わせ、銘文が武王の時のものではないかと考証している。歐陽脩は、この「毛伯敦銘」を入手したのは「集古録目序」を書き終えて石刻した後であり、これが周穆王期の「伯冏銘」よりも一層古い武王期の遺物であるため、「序」の「上自周穆王以來」という記述との間に齟齬が生じたと述べている。

劉敞は、この他にも『集古録跋尾』のなかで、金石への関心を共有し、その蒐集に協力してくれる友人として何度も登場している。たとえば、「韓城鼎銘」（『集古録跋尾』卷一）では、劉敞が韓城で入手した鼎の銘文を歐陽脩に贈り、それをさらに古文篆籀を解する太常博士の楊南仲（伝未詳。）が今文で書きなおし、そのなかにある両者の解釈が異なる部分について、歐陽脩がこの文章で解釈を併記し、諸家の意見を求めている。またこの文章のなかでは、劉敞が、長安で入手した古代の珍しい器物數十種について、『先秦古器記』（既佚。『公是集』卷三十六に「先秦古器記」一篇を収める。）を制作していることにも言及している。

文字に通じた人物としては、他に能書家としても知られる蔡襄（一一〇一—一一〇六七）の名が何度も挙げられており、なかでも次に示す「叔高父賁簋銘」（『集古録跋尾』卷一）には、劉敞・蔡襄による識語と、それを踏まえて書かれた歐陽脩の跋文を示し、彼らの間で取り交わされた金石の銘文を巡る意見が、歐陽脩によってまとめられていく様子を見ることが出来る。

右「煮簋銘」曰、「叔高父作煮簋、其萬年、子子孫孫永寶用。」原父在長安、得此簋於扶風。原甫曰、「簋容四升、其形外方內圓而小壻之。似龜、有首有尾有足有甲有腹。」今禮家作簋、亦外方內圓、而其形如桶。但於其蓋刻爲龜形、與原甫所得真古簋不同。君謨以謂、「禮家傳其說、不見其形制、故名存實亡。」原甫所見、可以正其繆也。故并錄之、以見君子之於學、貴乎多見而博聞也。治平元年六月二十日書。

右「煮簋銘」に曰く、「叔高父 煮簋を作る、其れ萬年にして、子子孫孫 永く寶用せん」と。原父 長安に在り、此の簋を扶風に得。原甫曰く、「簋は四升を容れ、其の形は外方内圓にして小さくして之を壻にす。龜に似、首有り尾有り足有り甲有り腹有り」と。今禮家の簋と作すは、亦 外方内圓にして、其の形は桶の如し。但だ其の蓋に於いて刻みて龜形を爲し、原甫の得る所の真の古簋と同じからざるのみ。君謨 以て謂へらく、「禮家は其の説を傳へ、其の形制を見ず、故に名は存し實は亡ぶ」と。原甫の見所は、以て其の繆りを正すべきなり。故に并せて之を録し、以て君子の學に於いて、多見にして博聞なるを貴べるを見はずなり。治平元年六月二十日書。

長安滞在中に扶風（現陝西省咸陽県東）で入手した簋きの銘文について、劉敞は「簋には四升が入り、外側は方形、内側は円形で小さく「壻」（磚。糸巻き状の形状か。）になっている。龜に似て、首・尾・足・甲・腹がある」と述べたが、彼らの同時代の礼の研究家が簋としているものは、やはり外は方形・内は円形で、その形は桶のようだが、その蓋を龜の形に刻んでおり、劉敞が入手した本物の古い簋とは異なっているという。これに対して蔡襄は、礼の研究家はその説を伝えても、その形状を

実見しておらず、そのため名称は存在しても実物はすでに亡びているのだから、劉敞が入手した現物によってその誤りを正すべきだと考えている。そこで歐陽脩は、両者の意見をあわせて記録し、君子の学問においては見聞の該博さが貴ばれるのだということを示そうとした、と記している。多くの友人たちの協力を得て金石の蒐集と考証を進めていくなかでは、必ずしもいつも意見が一致するとは限らないだろうし、その際に、どれか一つの意見に集約することを目指すのではなく、それらの説を併記して後世の人の判断を待つという歐陽脩の方法を、ここには見ることに加わるといふ形は、この他に「商雒鼎銘」眞蹟（『集古録跋尾』卷一）にも見ることができ。

歐陽脩が金石蒐集において、劉敞をはじめとする友人たちの助力を得ていたことについては、すでに顧永新氏「『集古録』名實・纂集考」第二節「『集古録』纂集考」（『歐陽脩學術研究』第十一章 中國典籍與文化研究叢書 第一輯 人民文學出版社 二〇〇三年）二百九十二頁で、「歐陽脩《集古録》的完成是和朋友們的多方幫助分不開的、得利于很多人的解囊相贈。」（歐陽脩の『集古録』の完成は、友人たちの多方面にわたる協力と切り離すことのできないものであり、数多くの人たちから贈られたものに多くを得ている。）と指摘され、また劉德清氏も、「歐陽脩的史學著述」（劉德清著・郭預衡審訂『歐陽脩論稿』第六章 北京師範大學出版社 一九九一年）の第四節「歐陽脩的其它史學著述」一、《集古録》百八十八頁において、「歐陽脩集録金石文字、除了自己多方搜求之外、還依靠朋友的多方幫助。」（歐陽脩は金石文字の集録において、自ら探し求める以外に友人の協力を頼っていた。）と指摘され、その具体例として、本章で既に見た劉敞が嘉祐六年の長安在任中に出土文物を歐

陽脩に送っていたことについての言及を挙げ、またその他に蘇軾（一〇三六—一一〇一）、江休復（一〇〇五—一〇六〇）、施昌言（？—一〇六四）、王堯夫（王質）（一〇〇一—一〇四五）の誤りか。といった人々から金石を提供されていることを指摘されている。

劉氏がここに挙げられている以外の提供者としては、「秦度量銘」『集古録跋尾』巻一）の、秘閣校理の文同（一〇一八—一〇七九）、集賢校理の陸經（生卒年未詳。慶暦元年（一〇四一）爲集賢校理（『續資治通鑑長編』巻一百三十四）を挙げる）ことができる。この「秦度量銘」では、彼らが所蔵していた古器と比較して考証することにより、同じ銘文を複数の器物に刻む習慣が存在したことを推測している。

金石学の成果のうち現存する最初期のものとして知られる『集古録』の編集は、歐陽脩の学術における志向の独自性を示すものとして捉えられ、またその功績は著作者である歐陽脩一人に帰されることが多いだろうが、本章で見たいいくつかの資料の内容は、劉德清氏・顧永新氏が指摘されているように、彼の周囲に金石文に関心を持ってその蒐集や考証を行う多くの友人たちが存在していたことを伝えている。歐陽脩の金石文の蒐集と考証、及び『集古録』の編集は、彼らとの繋がりのなかで、その協力を得て生み出された成果であると考えることができよう。

三 金石と人の有限性

このように、歐陽脩の『集古録跋尾』は、彼の周囲にいた金石を愛好しその収集や考証を行った多くの友人たちとの繋がりのなかから生み出されたものと考えられるが、そのような友人たちとの協力の一例である、巻一所収の「前漢二器銘」（林華宮行鐙^ト一、歲月見本文（五鳳

二年）連勺宮博山爐^一）は、歐陽脩の金石収集に協力した友人、劉敞（字原父）と裴煜（字如晦 生卒年未詳。慶暦六年省元（『宋詩紀事』巻十六）。嘉祐七年（一〇六二）爲太常博士、秘閣校理（『續資治通鑑長編』巻一百九十七）の書簡をそのまま掲載し、その後へ歐陽脩の跋文を付すという形を採っている。ここでは紙幅の制限もあるので、後者の、裴煜の書簡に添えられた歐陽脩の跋文のみを次に掲げたい。

後三年、余出守亳州、而裴如晦以疾卒于京師。明年、原甫卒于南都。二人皆年壯氣盛、相次以歿、而余獨巋然而存也。熙寧壬子四月。

後三年、余出でて亳州に守たり、而して裴如晦 疾を以て京師に卒す。明年、原甫 南都に卒す。二人皆年壯にして氣盛んなるに、相ひ次ぎて以て歿し、而して余獨り巋然として存するのみなり。熙寧壬子四月。

末尾に「治平元年（一〇六四）十二月十四日」の日付を持つ裴煜の書簡を受け取ってから三年が経ち、歐陽脩が知亳州（現安徽省亳県）の任にあった頃、裴煜が亡くなり、翌年には劉敞も亡くなったという。歐陽脩は、壮年でとても元氣だった二人の相次ぐ死に衝撃を受け、自分一人だけがぼつんとそびえる山のように生き残っていると感じている。長期間に渡った金石蒐集の間に、力を貸してくれた友人たちが次第に世を去って行く、このことは歐陽脩に特別の感慨を抱かせたようである。

金石をめぐる仲間たちとの交遊を懐かしみ、現在の自分の孤独を歎く表現は、この『集古録跋尾』のなかに他にも散見しており、そのひとつである「唐韓覃幽林思」武后時（巻六）では、かつての仲間たちを回想している。

右「幽林思」、廬山林數人韓覃撰。余爲西京留守推官時、因遊嵩山 得此詩、愛其辭翰皆不俗。後十餘年、始集古金石之文、發篋得之、

不勝其喜。余在洛陽、凡再登嵩嶽。其始往也、與梅聖俞・楊子聰俱。其再往也、與謝希深・尹師魯・王幾道・楊子聰俱。當發篋見此詩以入集時、謝希深・楊子聰已死。其後師魯・幾道・聖俞相繼皆死。蓋遊嵩在天聖十年、是歲改元明道、余時年二十六、距今嘉祐八年蓋三十一年矣。遊嵩六人、獨余在尔、感物追往、不勝愴然。六月旬休日書。

右「幽林思」、廬山林藪の人 韓覃撰。余 西京留守推官爲りし時、嵩山に遊ぶに因みて此の詩を得、其の辭翰の皆 俗ならざるを愛す。後十餘年、始めて古の金石の文を集め、篋を發して之を得、其の喜びに勝へず。余 洛陽に在りて、凡そ再び嵩嶽に登る。其の始めて往くや、梅聖俞・楊子聰と俱にす。其の再び往くや、謝希深・尹師魯・王幾道・楊子聰と俱にす。篋を發して此の詩を見て以て集に入れんとする時に當たりて、謝希深・楊子聰已に死す。其の後 師魯・幾道・聖俞 相ひ繼ぎて皆死す。蓋し嵩に遊ぶは天聖十年に在り、是の歲 明道と改元し、余 時に年二十六なり、今の嘉祐八年に距つること蓋し三十一年ならん。嵩に遊びし六人、獨り余在るのみ、物に感じ往けるを追ひ、愴然たるに勝へず。六月旬休日書。

歐陽脩が初めての任官で西京留守推官に在任していたのは、天聖九年（一〇三二）から景祐元年（一〇三四）のことである。当時嵩山へ遊山に出かけた際にこの詩を入手し、その言葉遣いと筆跡の脱俗性を愛でたが、その後十年余りして、古の金石の文を集めはじめた頃、箱を開いてこれを見つけ、喜びにたえなかつたという。これに続いて、洛陽在任中に行つた二度の嵩嶽への遊山の際の同伴者五名の名前を挙げては、箱を開いてこの詩を見つけ、『集古録跋尾』に入れようとした時には、そのうちの謝希深・楊子聰はすでに死去しており、さらにその後、師魯・

幾道・聖俞が相次いで世を去り、嵩嶽に遊んだ天聖十年から三十一年ほどが経過した今、一緒に遊山した六人のうちで生きているのは自分だけになってしまったということを悲しんでいる。金石は長い時間を超えてそこに刻まれた文字を伝えていくことができるが、人はそうではない。金石と対比することにより、人間の生命の無常はいっそう実感されるのである。

しかし、その金石の長久でさえ完全なものではない、と述べている章段も存在する。歐陽脩は「唐孔子廟堂碑」武德九年（『集古録跋尾』巻五）で、自分が金石蒐集を始めたきかけについて次のように記している。

右「孔子廟堂碑」、虞世南撰并書。余爲童兒時、嘗得此碑以學書、當時刻畫完好。後二十餘年復得斯本、則殘缺如此。因感夫物之終敝、雖金石之堅不能以自久、於是始欲集錄前世之遺文而藏之。殆今蓋十有八年、而得千卷、可謂富哉。嘉祐八年九月二十九日書。

右「孔子廟堂碑」、虞世南撰并びに書。余 童兒爲りし時、嘗て此の碑を得て以て書を學ぶに、當時の刻畫は完好なり。後二十餘年にして復た斯の本を得るに、則ち殘缺すること此の如し。因りて夫の物の終に敝るるに感じ、金石の堅きと雖も以て自ら久しきこと能はず、是に於いて始めて前世の遺文を集録して之を藏さんと欲す。殆ど今蓋し十有八年ならん、而して千卷を得るは、富めると謂ふべきや。嘉祐八年九月二十九日書。

ここでは、少年時代に書法を學ぶ手本とした時には完全な状態であつた刻まれた文字が、二十年後に再び目にするとかかなり傷んでいたことから、堅固な金石でさえ永久のものではないと感じ、それが過去の遺文を蒐集所蔵したいという思いに繋がつたと述べている。歐陽脩の金石蒐集が、長大な時間を超えて永遠に存在し続けるものの希求として開始され

たのではなく、むしろ金石すら有限であることに感銘を受け、その保持を指して開始されたものであることに注意すべきであろう。

また、このような発想は彼のみに限定されるものではないとも歐陽脩は述べている。「敦医銘」伯罔敦・張仲医（『集古録跋尾』巻一）の記述を見てみよう。

敦・医皆有銘、而云医獲其二。皆有蓋、而上下皆銘、銘文皆同。甚矣、古之人慮遠也。知夫物必有弊、而百世之後埋没零落、幸其一在、尚冀或傳爾。不然、何丁寧重複若此之煩也。其於一用器、爲慮猶如此、則其操修施設所以垂後世者、必不苟。

敦・医は皆 銘有り、而して云へらく 医は其の二を獲と。皆 蓋有り、而して上下皆銘あり、銘文 皆 同じ。甚しきかな、古の人の遠きを慮ふは。夫の物には必ず弊ること有るを知り、而して百世の後に埋没零落するも、幸ひに其の一在りて、尚ほ或ひは傳はらんことを冀ふのみ。然らざれば、何ぞ丁寧重複すること此の若きもの煩はしきや。其の一用器に於いて、慮を爲すこと猶ほ此くの如ければ、則ち其の操修施設して後世に垂るる所以の者は、必ず苟ならず。ここでは、金石を製作しそこに銘文を刻んだ古人は遠い未来を慮り、物は必ず壊れてしまうものだということがわかっていて、その上で百代の後に埋没して散り散りになっても、幸運にもそのうちの一つが残って、後世に伝わることをひたすらに願ったと考え、後世の人として古人のその意図に応えようとしている。ここでは、金石すら永久ではないという考え方は石に銘文を刻んだ古人もすでに持っていたと、歐陽脩は考えている。

さらに、「後漢郎中王君碑」光和元年（『集古録跋尾』巻三）では、金石すら逃れることのできない「物の限界」を超え得る存在の可能性につ

いて、次のように検討している。

右「漢郎中王君碑」、文字摩滅、不復成文、而僅有存者、其名字、官闕、卒葬年月皆莫可考。惟其碑首題云「漢故郎中王君之銘」、知君爲漢人、姓王氏、而官爲郎中爾。蓋夫有形之物、必有時而弊、是以君子之道無弊、而其垂世者與天地而無窮。顏回高臥於陋巷、而名與舜・禹同榮、是豈有託於物而後傳邪。豈有爲於事而後著耶。故曰、久而無弊者道、隱而終顯者誠、此君子之所貴也。若漢王君者、託有形之物、欲垂無窮之名、及其弊也、金石何異乎瓦礫。治平元年四月晦日書。

右「漢樊中王君碑」、文字摩滅し、復た文を成さず、而して僅かに存する者有り、其の名字、官闕、卒葬年月は皆考ふるべき莫し。惟だ其の碑首に題して云へらく「漢故郎中王君之銘」と、君の漢人爲り、王氏を姓とし、而して官は郎中爲るを知るのみ。蓋し夫れ有形の物は、必ず時有りて弊す、是れ以て君子の道は弊する無く、而して其の世に垂るる者は天地と與にして窮ること無し。顏回は陋巷に高臥するも、名は舜・禹と榮を同じくす、是れ豈に物に託して而後に傳はること有らんや。豈に事に於いて爲して後に著ること有らんや。故に曰く、久しくして弊する無き者は道、隠れて終に顯はるる者は誠、此れ君子之の貴ぶ所なり。漢の王君の若き者は、有形の物に託して、無窮の名を垂れんと欲し、其の弊するに及ぶや、金石は何ぞ瓦礫に異ならんや。治平元年四月晦日書。

これによると、「漢郎中王君碑」は、文字が摩滅して全く文をなしておらず、僅かに残っているものがあっても、その諱と字、官闕、卒葬の年月にはすべて考証できるものがないが、その碑首に「漢故郎中王君之銘」と題しているので、この人物が漢の人であり、王氏を姓とし、官位

が郎中であつたのがわかるという。これを踏まえて、この文章では形ある物の時間的有限性が、君子の道の普遍性及び永久性と対比されている。世俗を避けて路地裏に隠れ住み、物に託すことのない質素な生活を楽しんだ顔回の名声が、舜や禹といった古代の理想的君主にも匹敵するものとされて後世にまで伝わっているように、長い時が経っても廃れることのない「道」と、隠れていてもついには顕れる「誠」こそが、君子の貴ぶべきものであるとされている。これに類する考え方は、「唐人書楊公史傳記」歳月未詳。（『集古録跋尾』巻九）でも、次のように述べられている。

右「楊公史傳記」、文字訛缺。原作者之意、所以刻之金石者、欲爲公不朽計也。碑無年月、不知何時。然其字畫之法、迺唐人所書爾。今纔幾時、而摩滅若此、然則金石果能傳不朽邪。楊公之所以不朽者、果待金石之傳邪。凡物有形必有終弊、自古聖賢之傳也、非皆託於物、固能無窮也。迺知爲善之堅、堅於金石也。嘉祐八年十一月廿日書。

右「楊公史傳記」、文字訛缺す。原作者の意の、之を金石に刻める所以は、公の不朽の計を爲さんと欲するなり。碑に年月無く、何れの時なるかを知らず。然るに其の字畫の法は、迺ち唐人の書ける所のみ。今纔か幾時にして、摩滅すること此の若し、然れば則ち金石は果たして能く不朽に傳へんや。楊公の不朽なる所以は、果たして金石の傳を待たんや。凡そ物の形有るは必ず終に弊すること有り、古より聖賢の傳ふるや、皆物に託すに非ず、固より能く窮まること無きなり。迺ち知る善を爲すの堅きは、金石よりも堅きなりと。嘉祐八年十一月廿日書。

原作者がこの「楊公史傳記」を金石に刻んだのは、楊公の不朽を計るうとしたからであり、文字の筆画の方法からは唐代の人の手になるもの

と考えられるが、それほど時間が経過していかないにも関わらず、文字には誤りや欠落があるという。このような状態を見た歐陽脩は、金石が不朽であるという認識に対して疑問を抱き、楊公の不朽の名声は金石によって伝えられることを必要とするものであろうか、と考えている。そこで導き出される結論は、およそ形のある物には必ず終には壊れてしまうということがある、古から聖賢が伝えることは、物に託して不朽ならしめようとするものではなく、それ自体で、もともと窮まらないことが可能なのだ、ということなのだが、これは先に見た漢「樊中王君碑」で、形ある物の時間的な有限性が、君子の道の普遍性及び永久性と対比されていたことと類似の発想によるものだろう。

歐陽脩の考えにおいては、金石は人間と対比したとき、その存在する時間の長久さを印象づけるものとして位置づけられる。しかしその一方で、形ある物である金石は、やはり時間的な有限性から逃れることのできないものであり、これと対比しうる普遍性や永遠性をそなえるものとして、儒家的な理想としての君子の道が位置づけられるのである。

四 後代への継承

金石に関心を持つ友人たちの協力を得ながら、歐陽脩によって『集古録』ならびに『集古録跋尾』としてまとめ上げられた成果は、その後、彼らよりも後の世代に継承されていく。最後に本章では、その状況についていくらか考えてみたい。

これまで本稿で『集古録跋尾』の各章段を引用する際、文中に執筆時期が記されているものについてはそれを含めて提示してきたが、それらの日付は、「集古録目序」が最も早い嘉祐七年（一〇六二）であるのに

続いて、嘉祐八年（一〇六三）から治平元年（一〇六四）に集中していた。このような時期の集中をもたらした最大の要因は、歐陽脩の金石蒐集と考証に大きく貢献した劉敞が、嘉祐五年（一〇六〇）から治平三年（一〇六六）まで、永興軍路安撫使兼知永興軍府事として長安に在任し、既に見た資料で歐陽脩が記していたように、新たに発掘された古物の拓本を彼に提供してくれたことにあるだろう。

さらにもう一人、同じ時期にこの近辺に赴任していた人物がいる。蘇軾である。歐陽脩・劉敞からは一世代下の蘇軾が、初めての任官で簽書鳳翔府節度判官廳事として鳳翔（現陝西省鳳翔県）に赴任したのは、仁宗嘉祐六年（一〇六一）十二月であり、彼はその後、殿中丞に除せられて開封に移る英宗治平元年（一〇六四）十二月までの三年間、当地に滞在した。既に見たように『集古録跋尾』には、彼から古物が提供されたこと記す章段も存在しており、彼が師匠格に当たる歐陽脩の金石蒐集に対して関心を寄せていたことがわかる。

蘇軾は鳳翔在任中に「鳳翔八觀」（清 馮應榴輯訂 蘇文忠公詩合註 卷四 中文出版社 一九七九年）という八首からなる連作詩を制作し、その叙に次のように記している。

「鳳翔八觀」詩、記可觀者八也。（中略）鳳翔當秦蜀之交、士大夫之所朝夕往來。此八觀者、又皆跬步可至。而好事者有不能徧觀焉、故作詩以告欲觀而不知者。

「鳳翔八觀」詩は、觀るべき者八を記すなり。（中略）鳳翔は秦蜀の交に當たり、士大夫の朝夕に往來する所なり。此の八觀は、又皆跬步して至るべし。而るに好事者に徧く焉を觀ること能はざる有り。故に詩を作り以て觀んと欲すれども知らざる者に告ぐ。

ここではこの連作詩について、鳳翔の見どころ八点を見たいと思いな

がらも見えていない好事の者に書き示すために制作したと述べているが、これは、よその土地にいながら当地の古物に関心を持っている人物を想定したものであり、それにふさわしい人物としては、歐陽脩が想定されるのではないだろうか。

また、この連作詩中にある「石鼓歌」「詛楚文」が寄せられた対象が、歐陽脩の『集古録跋尾』に採られているものであることも、両者の関連を窺わせるのではないだろうか。いずれの作品も長文であり、ここでは紙幅の制限もあるので引用しての検討は避けるが、歐陽脩『集古録跋尾』巻一に収められた「石鼓文」は、岐陽（現陝西省鳳翔縣）の孔子廟所蔵の十個の石鼓に対する評価の変遷や伝承の状況、及び現在の刻文の狀態について記し、さらにそれらについて指摘できる疑問点と、これに關して唐代の韋應物と韓愈「石鼓歌」とが既に示している説の当否について検討している。一方、蘇軾の「鳳翔八觀」中の「石鼓歌」（蘇文忠公詩合註卷四）は、これと同じ対象を取りあげ、実見した石鼓の文字の様子とその解説の困難さについて述べ、さらに石鼓の先駆けとなる存在や、製作された当時の状況について自由に想像している。伝承に關しては、秦始皇帝の焚書当時の困難な状況を超えて伝承されたことの不思議さについて述べ、詩の末尾では、「細思物理坐嘆息、人生安得如汝壽。」（細さに物理を思ひて坐らに嘆息す、人生 安んぞ汝の如き壽を得ん。）と、人間の生命の有限と對比して、「物」の不変性に対する驚嘆を歌っている。

散文の跋文と、韻文の詩というジャンルの違いがあり、当然とも言うべきだが、論理的に考証を進めていく跋文に対して、詩は自由に想像を膨らませつつ、長い時間を超えて伝承されてきたことに対する感嘆を表現している。また、歐陽脩はこの跋文のなかでは物の有限性について言

及していないが、蘇軾の詩では、物と人間とを対比し、それぞれの有限性について述べている。これはこの二篇の間での視点の違いと言いうことができるが、すでに見たように、歐陽脩は『集古録跋尾』に収められた他の文章のなかで、金石と人、それぞれの存在の有限性について何度も言及しており、古物に関わってやりとりをする中で、蘇軾が歐陽脩のこのような発想から影響を受けた可能性はあるのではないだろうか。

簽書鳳翔府節度判官廳事在任中の嘉祐八年（一〇六三）に蘇軾は、当時の知鳳翔府である陳希亮（一〇〇〇—一〇六五）が造営した臺に寄せた「凌虚臺記」（東坡集卷三十一 古典研究會叢書漢籍之部 第十六卷 汲古書院 一九九一年）のなかで、「物之廢興成毀、不可得而知也。」

（物の廢興成毀は、得て知るべからざるなり。）と述べて、この臺が永遠のものではないと述べているが、このような発想にも、既に見た歐陽脩『集古録跋尾』でくり返される人と物の有限性に関する感慨との関連を認めることができるのではないだろうか。物の有限性に関する思考は、この後の蘇軾の文章の中で幾度も登場するようになるが、「鳳翔八觀」詩や「凌虚臺記」に現れるものは、それらの中でも早い時期のものであり、この時期に歐陽脩の、あるいは彼を含む一世代上の人々が抱いていた金石と人の有限性に関わる感慨に接したことが、その後の蘇軾の発想に大きな影響を与えたと考えることができるのではないだろうか。

その後蘇軾は、通判杭州在任中の熙寧五年（一〇七二）に、当時、知湖州であった孫覺（字、莘老。一〇二八—一〇九〇）が州内の漢以降の金石碑刻を蒐集した墨妙亭に「墨妙亭記」（東坡卷三十一）寄せている。孫覺のこのような蒐集行為も、歐陽脩等の金石愛好を継承したものと云うことができるが、蘇軾はここでも、

或以謂余、凡有物必歸於盡、而恃形以爲固者、尤不可長、雖金石之

堅、俄而變壞。至於功名文章、其傳世垂後、猶爲差久。今乃以此託於彼、是久存者反求助於速壞。此既昔人之惑、而莘老又將深簷大屋以錮留之。推是意也、其無乃幾於不知命也夫。

或^{あるひと}以て余に謂へらく、凡そ物有れば必ず盡くるに歸し、形を恃みて以て固しと爲す者は、尤も長かるべからず、金石の堅きと雖も、俄にして變壞す。功名文章に至りては、其の世に傳はり後に垂るること、猶ほ差^{ちや}久しと爲す。今乃ち此を以て彼に託すは、此久しく存する者の反りて速かに壞るるに於いて助けを求むるなり。是既に昔人の惑なり、而も莘老は又深簷大屋を將て以て之を錮留す。是の意を推すや、其れ乃ち命を知らざるに幾きこと無からんや。

と、「或」の言葉として、金石を含む「もの」の有限性について述べており、鳳翔期から続く金石をめぐる思考がここにも継承されている様子を見ることができる。

さらに、蘇軾の周囲で、孫覺の他にも金石を好んだ人物としては、李公麟（一〇四九—一一〇六）を挙げることができる。彼が金石に精通していたことについて、元・脱脱等撰『宋史』卷四百四十四「文苑傳六」（中華書局本）の伝には、

好古博學、長於詩、多識奇字、自夏・商以來鍾・鼎・尊・彝、皆能考定世次、辨測款識、聞一妙品、雖捐千金不惜。

古を好み博學にして、詩に長じ、多く奇字を識り、夏・商より以來の鍾・鼎・尊・彝は、皆能く世次を考定し、辨測款識し、一妙品と聞けば、千金を捐つると雖も惜しまず。

と記されており、また、蔡條（生卒年未詳）撰『鐵園山叢談』卷四（馮惠民・沈錫麟點校『鐵園山叢談』唐宋史料筆記叢刊 中華書局 一九八三年第一版）は、李公麟の著した『考古圖』が元符年間（一〇九八—

一一〇〇）まで伝わっており、さらにこれが大觀初年（一一〇七）に徽宗が『宣和殿博古圖』を編集する際のものとなり、彼の周囲にいた

すでに見たように、歐陽脩の『集古録』そのものが、彼の周囲にいた多くの友人たちの助力を得て生み出されたものであったが、彼らの金石蒐集とそれをめぐる思考は、孫覺や蘇軾、李公麟らに影響を与え、さらに次の時代に繋がっていった。宋代を代表する金石研究の成果である『金石録』を著した趙明誠（一一〇八—一一二九）が、その「金石録序」（黄墨谷輯校 重輯李清照集 卷六 附一 中華書局 中國古典文學基本叢書 二〇〇九年）に記した言葉を引用して本稿の末尾としたい。彼は『集古録』をより完全なものとするべく金石研究を続け、『金石録』を完成したのである。

余自少小、喜從當世學士大夫訪問前代金石刻詞、以廣異聞。後得歐陽文忠公『集古録』、讀而賢之、以爲是正訛謬、有功於後學甚大。

惜其尚有漏落、又無歲月先後之次。思欲廣而成書、以傳學者。於是益訪求藏蓄、凡二十年後粗備。

余 少小より、喜びて當世の學士大夫に従ひて前代の金石刻詞を訪問し、以て異聞を廣くす。後に歐陽文忠公の『集古録』を得、讀みて之を賢しとし、以爲く 訛謬を是正すれば、後學に功有ること甚だ大ならんと。其の尚ほ漏落有り、又歲月先後の次無きを惜しむ。廣くして書を成し、以て學ぶ者に傳へんと思ふ。是に於いて益ます藏蓄を訪求し、凡そ二十年の後に粗ぼ備はる。